

目に見えない音楽 リスニングガイド

2025リマスターと
制作ノート

による
ニール・スレイド



注: このガイドのデジタル版にある青いリンクをクリックすると、インターネット上の適切なリンクに移動します。

序章

以下は、1983年に完成し、2025年1月にリマスターされた私のアルバム「Invisible Music」のレコーディングに関する私の思い出の一部です。いくつかのイベントの正確な日付など、元のレコーディングに関するいくつかの細かい詳細は記憶から失われていますが、43年前のその時期に関する私の観察は、何年も経った今でも私の記憶が頼りにしている限り正確で真実であると保証します。

それはすべて、4年生のとき、両親がちょうど365ドルで買ってくれた新品のコーン社のアルトサックスを演奏したことから始まりました。母は私にトランペットではなくその楽器を演奏するよう勧めていました。叔父がすでにその道を先導し、1940年代にニューヨーク州北部のキャッツキル山地のリゾートで失恋した独身者たちにセレナーデを歌うプロのサックス奏者だったからです。

小学校を卒業して14年ほど経って、私はデンバーのメトロポリタン州立大学音楽学部で音楽教育の学位を取得しました。この大学は、州の教員免許を取得するには最高の場所として知られていました。母は安定した収入のある公立学校の教師で、両親は私に実用的なスキルを身につけたいという気持ちを植え付けてくれたので、私は音楽の学位を取得するよう奨励されました。

私自身は、高校の中頃にはプロのミュージシャンになろうと決め、音楽にどっぷり浸かっていて、すでに自宅の地下室でなんとか作曲して録音を始めていました。その中には、親友のロバート・ケネディと（頭の中で）ギターとウクレレのデュエット曲を書いたことも含まれていました。いや、あの曲ではなく、同じ名前の曲で、まったく同じものです。

ロバートと私は中学校で出会い、他の類似点の中でも特に学業の才能が同じだと判断され、同じホームルーム「セクション」に入れられました。ロバートは学校の弦楽オーケストラで演奏し、私は学校のコンサートバンドのメンバーでした。高校生になる頃には、私たちはフランク・ザッパとドン・ヴァン・ヴリート（キャプテン・ビーフハートとして有名）の大ファンになっていました。

私たちは、ビーフハートの混沌としたダダイズムスタイルを中心に、自分たちのオリジナル曲を創作し演奏するために最善を尽くしました。（その取り組みの詳細と現在も残っている録音は、ユーモアたっぷりの音楽自伝的オーディオブック「フリー・ダート」でご覧いただけます。私のYouTubeチャンネルでオンラインで見つけたもの：[「Free Dirt」 2時間オーディオブック \(音楽付き\)](#)

ある晩、ダウンタウンのナイトクラブのオープンマイクナイトで、私たちはキャプテン・ビーフハートとマジックバンドの演奏を最近見たのと同じステージで演奏することができました。その思い出深いイベントでは、ロバートの小学生の弟マイケルが指揮棒の代わりに手に新鮮なニンジンを持って私たちの演奏を指揮してくれるのがびっくりだと思いました。残念ながら、私たちは正確かつ華麗に演奏し、自分たちの演奏にとっても満足していたにもかかわらず、観客は私たちが期待していたスタンディングオベーションをしませんでした。

ロバートと私は、二人とも大学の音楽学部に入學するまで一緒に演奏を続けました。ロバートはコロラド大学ボルダー校に、私はデンバーに残り、最初は KCFR のデンバー大学キャンパスに、その後メトロポリタン州立大学に入學しました。それから約 40 年後の 2025 年現在、ロバートはボストンの 5 つ以上のハイレベルなオーケストラで、すべて同じシーズンにビオラを演奏するという榮譽を十分に得ていることは言うまでもありません。

しかし、10代の頃の冒険に戻ります…

やがて、18 歳になったある日の午後、サクスを手にヒッチハイクをしているときに運命が動きました。高校の同級生で、以前から知り合いで、少し離れたところから憧れていた、とても魅力的な 10 代の少女に乗せてもらいました。車の中で、私は彼女に、1,000 マイル離れたロサンゼルスにいるキャプテン ビーフハート アンド ヒズ マジック バンドに加わろうかと考えていることを話しました。彼女の長いブロンドの髪と揺れるまつげのおかげで、私はデンバーに留まり、比較的快適で安全な故郷で夢を追いかけるよう説得されました。

その結果、私は高校 3 年生のときに中退を真剣に考え、高校卒業資格試験で GED を取得した後、なんとか高校を卒業することができました。しかし、結局、数クラスを残して 1 年を終え、大勢の友人が一斉に卒業するのと同じように公立学校生活を終える方が楽だとわかりました。結局、卒業式はデンバー コロシウムで行われましたが、偶然にも、その 1 年後、ロバートと私がレッド ツェッペリンの 1973 年アメリカ ツアーで満員の観客の前で演奏するのを観たのとまったく同じ場所でした。

こうして私は両親の願いに屈し、高校卒業後すぐにデンバーの名門で学費の高いラモント音楽学校に入學を申し込み、合格しました。両親は、卒業後のその夏に私が学校を出て寮に住み、少なからぬ費用をかけてフルカリキュラムを受講するための費用を支払ってくれました。しかし、あっという間に私は大学生活にまったく興味を失い、受けていた授業をすべて中退してしまいました。それよりも、寮のルームメイトをかなり苛立たせていたケイのエレキギターとラジオシャックの PA アンプの音量を上げて時間を過ごすほうがましだと思えたのです。

大学に通うために家を出てからわずか 2 週間後のある日の午後、私はバッグとサクスを玄関ポーチに置いて、恐怖に震える両親の家の玄関に現れ、「ただいま！」と告げた。

なんとか支払った授業料の 50 パーセントを返金してもらいましたが、信じられないことに 9 月になるとまた考えが変わってしまい、学部長室に戻って入學させてほしいと懇願しました。驚いたことに、おそらくドルマーケを目に浮かべながら、彼らは考えを撤回し、私を入學させてくれました。

DU での私のサクスの先生は、他にもないクラリネットの名手レイ・キレリスでした。彼は、当時のクール・タバコ雑誌の広告でクールなミュージシャンとして取り上げられたことで最も有名です。

彼は、私の最初の生徒であるコンからサクスをアップグレードするように私を説得し、彼自身の 1952 年製セルマー スーパーバランスアクションを私に売ってくれました。これは、デイブ ブルーバック カルテットのポール デスモンドが演奏したのと同じモデルで、数年後に私がインビジブル ミュージックで演奏し、今でも使っています。レイはセルマーからルブラン ブランドの楽器に愛用を切り替えなければならなかったのですが、彼はちょうど後者の会社の新しい宣伝に雇われたばかりでした。数年後、彼はセルマー アルトを手放して売ったことをとても後悔していると私に話しましたが、残念ながら、それは私にとって最終的に利益となりました。それは、サクス愛好家や演奏者の間で最も有名な楽器の 1 つです。

いつの時代も愛されるモデルですが、自尊心のあるサクソ奏者でルブランのサクソを演奏していると認める人はほとんどいません。



しかし、もう一度言いますが、私はちょうど1つの英語の授業に出席した後、コンサートバンド以外のDUの授業や音楽のレッスンに出席することを拒否しました。私はちょうど1年間、アンサンブルで演奏を続けました。その間に、真冬の太陽が降り注ぐカリフォルニアへのツアーにバンドと一緒に出かけ、さらに1週間、カンザス州ウィチタへのコンクリート打ち合わせ旅行にも行きました。

DUでの1年間の終わりに、父は私に、遊んでいる時間は十分あるかと尋ね、もっと真剣に、現実的に大学に復学するよう勧めました。それで、私はもっと現実的なキャンパス、デンバーのメトロポリタン州立大学音楽学部に着かれました。この大学は、非常に大きな規模の大学で、非常に優秀な教育者を輩出していることで非常に評判が高く、キャンパスはデンバーのダウンタウンに点在しており、学部の建物から次の建物に移動するには、デンバーのダウンタウンの迷路のような通りをかなり歩く必要がありました。

DUとは対照的に、メトロの学生の平均年齢は28歳で、学生構成は社会人で、実際に地元で働いているストリートミュージシャンなど、20代の学生よりずっと年上の人々もたくさんいます。キャンパスは親しみやすく、歓迎的な雰囲気です。私は教職員や学生たちに囲まれてすぐにくつろげました。DUの雰囲気とは違って、彼らはユーモアのセンスがあり、型にはまらない私の癖や性格を受け入れてくれました。

メトロを卒業する前から、私は地元のレコーディングシーンに精通しており、2つのレコーディングプロジェクトを立ち上げていました。1つは、高校時代から集めてきたオリジナルのアコースティックピアノソロ曲のアルバムでした。

数年後、私は「別の次元からのピアノ印象」と題したこのアルバムを、大型の商業用 24 トラック スタジオで、豪華な 9 フ
ィートのボールドウィン コンサート グランド ピアノを駆使して録音しました。

しかし、その後すぐに、私は、銀行口座に余裕がないミュージシャンに、音楽を録音するだけでなく、録音機器の
操作を実際に体験する機会も与えてくれる小さなスタジオを発見しました。その場所が「フリー・リーリン・スタジオ」で、私
はそこで2枚目のアルバム、そして初めてのマルチトラックプロジェクトである「インビジブル・ミュージック」を制作しま
した。

(続き)



トラック1

スーパークールホイップ

アルバム「Invisible Music」は、その後40年間に私が制作するすべてのレコーディングと同様に、すべてオリジナル曲で構成されています。これは8トラックのレコーディングで、Free Reelin' がまだオーナーの自宅のリビング ルームにあったときに行われました。このスタジオはユナイテッド航空の機長ケン ケネアリーと妻のシャーリーによって運営されており、彼らの情熱と趣味でした。ケンはアマチュアのフォーク ギター奏者でしたが、フライトの合間の空き時間に音楽とそれを取り巻くすべてのテクノロジーへの興味にすぐに夢中になりました。

ケンとシャーリーが地元の音楽コミュニティに惜しみない寛大さを示したおかげで、多くのミュージシャンがあらゆる種類の音楽活動を始め、それをすべて録音することができました。

私にとっては、それは重要な経験となり、結局私はそのスタジオで20年以上を過ごすことになった。ここで私はレコーディングのあらゆることを学び、作曲と編曲のスキルを磨いた。そのスキルのおかげで、後年私は自分のスタジオ設備を使って自分の家で音楽制作のすべてを自分で引き受けることができたのだ。

スーパークールホイップは、サクソとノコギリ波シンセサイザー（初期のモノフォニック「ミニコルグ」）、そしてエレクトリックベースとドラムの音の饗宴です。その作曲形式は、フランク・ザッパの画期的でありながら型破りなインストゥルメンタルロックジャズフュージョン序曲「ピーチズ・エン・レガリア」をモデルにしています。フランクは長年私のロールモデルでありインスピレーションの源であり、スーパークールホイップは彼の音楽を反映しています。

私の音楽的傾向、そして彼の折衷主義と幅広く型破りな音楽のパレットに対する熱意。

17歳のとき、管理人が私と友人（イエロー ジェロという名前を名乗っていた）をビルに招き入れてくれたとき、フランクに5分間会ったこともあった。そのビルは、ザッパがアルバム「アポストロフィ」のツアー中にラジオインタビューを受けていた場所だった。フランクは、ガラス張りのレコードブースの中から、グルーチョ マルクスのようにいたずらっぽく眉を上下に動かしながら、私たちににっこり笑った。出てきたとき、彼は辛抱強く礼儀正しく、サインをくれただけでなく、音楽の作曲と編曲に関する本を何冊か勧めてくれた。

彼は私への別れの言葉とアドバイスとして、「あなたは雇用されているということを忘れず、ミュージックのために働く。」

43年ぶりにリマスターされたこの録音で、ドラムパートをミックスのかなり前に持ってくることができました。これは何十年もやりたかったことですが、ステレオミックスしか残っておらず、8トラックのマルチトラックマスターを処理していなかったため、それを実現する手段がありませんでした。オリジナルのミックスダウンでは、ドラムはほとんど聞こえませんでした。しかし、2025年の今、私の音楽編集ソフトウェア（Izotope

Ozone 11）を使用すると、録音内のドラムを他のすべてのサウンドから分離し、ドラムパートのみの音量を上げることができます。これは、ここ数年で初めて利用可能になった奇跡的な技術的進歩です。

2025年のリマスターでは、明瞭度、ステレオ フィールド、パンチの大きな違いがはっきりと聞き取れます。

アルバムのドラマー、ロバート・ウルフソン博士は、45年経った今でも友人であり、1983年に外科研修医をしていた。ボブはその後、著名な外科医となり、後に偉大な医学教育者となった。ボブには信じられないほどのエネルギーがあり、医学部と研修医を両立させながら、同時に非常に有能で創造的で高いレベルのドラム演奏をこなすことができたのは、まさに超人的である。

最初にボブに出会ったのは、サティア ラウンジの真向かいの有名なイースト コルファックス アベニューにある、彼のいとこであるモリー ウルフソンの太陽エネルギー（テーマ）書店でした。イースト コルファックスはアメリカで最も長いメイン ストリートとして有名で、モーターやバーが立ち並び、丘陵地帯からデンバーを通り、さらに東の平野部まで伸び、全長 50 マイルに及びます。

サティアは、スムーザーズ・ブラザーズ、ジュディ・コリンズ、そして当時は若く悪名高かったボブ・ディランが出演した場所だった。1960年代初頭に登場しました。この研究所には、後に私の脳科学と行動科学の第一人者となり、指導者となった TD Lingo もいました。当時は、NBC の夏のフォーク ミュージック ショーの代役司会者としてしか知られていませんでした。[\(参照:休眠中の脳研究開発研究所の真実の物語\)](#)

エレクトリックピアノのモリーとドラムのボブは、毎週土曜日の午後、銀行の2階にある書店の向かいのホールでジャズのスタンダードを演奏するために集まっていた。すぐに私も参加するよう誘われました。すぐにベース奏者のブルース・ハンソンが加わり、手作りのヒースキットアンプを使ってグループが結成されました。やがてモリーがバンドを離れ、私はフェンダー・ローズのピアノでキーボードを担当しました。やがてブルースも去り、まったく新しいベース奏者、10代の若いタミー・ディーバートと、後に別のベーシストのティム・ライトバーンが加わり、プログレッシブジャズトリオが結成されました。私たちはジャズのスタンダードだけでなく、私自身の非スタンダードな作曲もどんどん演奏するようになりました。

ボブはこう回想する。「当時の私は他のことに気を取られていました。私は外科研修医2年目で、小児移植外科の業務に携わっていました。」

大学病院です。毎日是一日中、隔日では夜通し病院で働いていました（週120時間以上）。

彼は続けます。「レコーディング セッションのほとんどは夕方に行われました（私の記憶では）。そのセッションに間に合うように、私は病院にいるふりをしなければなりません。右耳にポケベルに接続された小さなイヤホンを装着し、その上からスタジオ モニター ヘッドフォンを装着しました。レコーディング セッション中、ポケベルが何度かビープ音を鳴らして気が散りましたが、それを聞こえたのは私だけでした。」

「これらのセッションの前に、私はレコーディング スタジオで何度か働いたことがあります。大学時代にはセッション プレイヤーとして（時給制で）働き、1970 年代には地元のバンドとスタジオ レコーディングも行いました。私が行った他のセッションと比べると、これらのセッションは比較的うまくいきました。良い演奏を得るには、各曲を数回テイクするだけで十分でした。」

ボブはドラムスティックを巧みに操る細かい手の動きの調整を駆使したドラマーとしての経験があり、それがメスや牽引器具、針を扱う外科医としてのスキルに少なからず貢献したのではないかと思います。

特に「Collective Intelligence」と「Track On The Back」では、ベースギターのパートに注目してください。これらは、1970 年代後半から 80 年代、さらにそれ以降も一緒に音楽を演奏していた仲間のミュージシャンによって演奏されたものです。

ティム・ライトバーンは、体格の大きな、とても風変わりな人物でしたが、誠実で温かい性格の、とても創造的で独創的なミュージシャンでした。これ以上優れたベーシストは望めません。私の意見では、この曲や他の曲でも、他のどの曲にも劣らない素晴らしい演奏を披露しています。

結局、「Cool Whip」は長年にわたり 4 つの異なるアレンジで録音され、それぞれ独自のアレンジで 3 枚のアルバムに収録されています。しかし、初公開バージョン、そしておそらく私のお気に入りのバージョンは、ここ Invisible Music にあります。

**興味深いと思われるのは、私の YouTube ビデオ「[Primitive Cool Whip 1969?](#)」です。

特別ボーナスとして、これは私がおそらく15歳くらいの頃、駆け出しの作曲家兼ピアノ奏者として「Cool Whip」の一番最初の萌芽を弾き出している録音が残っているものです。

生き残ったビートルズのリンゴ・スターとポール・マッカートニーは、私がスーパー・クール・ホイップのリマスターに使用したのと同様の技術を使用して、ビートルズ最後の曲を録音しました。これは、ジョン・レノンがかつて録音した非常に質の悪い古いカセットから彼のボーカルを同様に分離、抽出、復元したものです。このプロセスと、その結果生まれた曲「Now and Then」を紹介するドキュメンタリーをまだご覧になっていない方は、こちらをご覧ください。

[ビートルズの短編ドキュメンタリー映画「Now and Then」](#)

と「[Now and Then ミュージックビデオ](#)」の完成曲

トラック2 ビーモップ

Bee Mop というタイトルは、2つの由来から来ています。1つ目は、1940年代に米国で生まれたジャズスタイルである音楽ジャンル、Bebop です。このスタイルは、速いテンポ、複雑なコード、長い即興ソロが特徴です。Bee Mop は、ある程度これらの特徴を共有していますが、テンポはより穏やかで、途中で新しい音楽テーマを導入して、即興セクションを区切っています。これは従来の形式には見られず、私が他の作曲でも採用しているものです。

他のトラックと同様に、即興演奏には初期のモノフォニック Mini-Korg シンセサイザーという基本的なシンセサイザーを使用し、コントロールルームで当時最先端の Eventide ハーモナイザー サウンド プロセッサを使用してサウンドをさらに処理および調整しました。

伝統的なビバップとは異なり、Bee Mopには多数の拍子記号が頻繁に変更されており、明らかにモダンで冒険的な雰囲気を出しています。これらの複数の拍子記号の変更は、現在も当時もポピュラー音楽の99%で主流となっている単一の4/4拍子という標準的なビバップの使用を超えています。

第二に、元のタイトルは「Be Mop」でしたが、残念ながら元の録音には録音開始時に不快な電磁干渉のブザー音が混入しており、それを除去できなかったため、後に「Bee Mop」に変更しました。その後、蜂のブンブンという音を挿入することでこの問題を解決し、不要な音を完全に隠すことができたので、安心しました。これが、タイトルを変更した「Bee Mop」です。

Bee Mopとその他の類似のジャズ/クラシック/ロック フュージョン トラックをInvisible Musicで当時聴いていた音楽からインスピレーションを得ています。ジョン・マクラフリンのマハビッシュヌ・オーケストラ、キャノンポール・アダレイ（特にジョージ・デュークのエレクトリックピアノとシンセサイザーがフィーチャーされたアルバム『フェニックス』）、ジョン・リュック・ポンティ、チック・コリア、そしてフランク・ザッパのインストゥルメンタル音楽などです。また、クラシックとジャズの音楽教育と、4年生から学校でアンサンブルで演奏した経験、そして1960年代、70年代、80年代に流行したロック音楽の多くも取り入れています。

タミーとザ・ディネット

ちなみに、Invisible Music という名前は、当時私の音楽が商業的にあまり知られておらず、一般に受け入れられていなかったことから付けられました。あるコンサートの後、友人が簡潔にこう言ったのをはっきり覚えています。「本物の音楽だけを演奏していれば、君は素晴らしいよ。」

デンバーはカントリーやウエスタン、ミドル オブ ロード ロックンロールが好まれる街でしたが、ザッパやビーフハートなど、より冒険的なアーティストが訪れることもありました。私の友人には、デンバー出身のポール コニーもいます。彼は1960年代にシンセサイザーの使用を開拓し、全国的に有名なグループ、ローター アンド ザハンドピープルで実験音楽の先駆者でした。彼らが大成功を収めるには、まずデンバーから移転しなければならなかったことに注意してください。

前述のように、フリー・リーリン・レコーディング・スタジオは、貧しい生活を送るミュージシャンに、わずかな費用（1時間5ドルから）で音楽レコーディングに挑戦できる場所を提供しました。しかし、すぐに噂が広まり、この自宅スタジオには、ケニー・ヴォーン、ジル・ソビュール、ジョン・マキューエンなど、後に全国的に有名になる多くのデンバーのミュージシャンが訪れ、利用しました。

私が Free Reelin' に着任した頃には、8トラックのレコーディングを提供するまでに成長していましたが、それでも、彼らのリビングルームがスタジオ ステージとして機能し、隣接するベッドルームがエンジニアリングブースとして装備されていました。音楽大学を卒業してわずか数年で、Free Reelin' は、演奏者としてだけでなく、オーディオ エンジニアおよびプロデューサーとしての実践的な経験を積む機会を与え、私自身のオリジナル音楽を制作する手段を提供してくれました。

最初は、ベースパートをタミー・ディーパートにカバーしてもらいました。彼女は大学時代に会った、ベースギターの天才で、当時彼女は16歳でした。まだ高校生だったのですが、メトロ音楽大学の教授の1人が、学校のジャズバンドに同席しないと彼女を誘ったのです。私はすぐに彼女と仲良くなり、自分のアンサンブルに彼女を採用しました。

ドラマーと一緒に、私たちはアンサンブルとして「タミー・アンド・ザ・ディネッツ」として知られていました。Invisible Musicでは、アルト サックス、ソプラノ サックス、フルート、アコースティック ピアノ、フェンダー ローズ エレクトリック ピアノ、モノフォニック ミニ コルグ シンセサイザーを演奏しました。

タミーはアルバムのベース奏者としてスタートし、2、4、7、8 曲目で聴くことができます。彼女の演奏はリズムが正確で、想像力豊かに緻密です。しかし、私がオーバーダブをしながら何ヶ月も続いたプロジェクトの途中で、タミーはボーイフレンドと過ごす時間を増やすためにグループを脱退し、切実に必要な現金を得るために衝動的にベースを質に入れました。私がこれを知ったとき、すぐに質屋に車で行き、彼女が私たちと一緒に演奏を続けられるようにベースを質入れしましたが、すぐに彼女はまたそれを質入れしてしまいました。



私、タミー、ボブ博士

結局、私はタミーとの努力をあきらめ、代わりにダウンタウンのナイトクラブで初めて会った別のミュージシャン、ティム・ライトバーンに頼りました。その夜、ステージから彼は誰かリクエストがあるかと尋ね、私はザッパの「ブラウン・シューーズ・ドント・メイク・イット」を叫んで応えました。驚いたことに、彼は笑いながらその曲を完全に認識し、そのリクエストを勇敢に試してくれました。やがて彼は私のオルタナティブな音楽プロジェクトに参加してくれました。

当初、ティムはザ・ディネッツの直前のバンドで演奏していました。そのグループはフリー・ダートと名付けられ、私のウーリツァー・エレクトリック・ピアノの背面にアクリル絵の具で面白おかしく書かれていました。それは私がまだ大学時代に結成した最初のバンドでした。

この最初のバンドの名前に「フリー ダート」という名前が使われたのは、誰かがこの宣言が書かれた看板を見るたびに、必ず私たちの音楽グループを思い出さうという冗談めいた考えからでした。私は、この名前は、街中の空き地や建設現場でよく見られる永久的な無料広告を永遠に活用する、非常に実用的で便利な名前だと半ば本気で思っていました。

注目すべきことに、メトロ音楽学部での私の最初の学生リサイタルでは、ティムがベースを弾いてくれました。一緒に演奏したのは、すぐに有名になるジャズギタリスト、ビル・フリゼールです。私は、近くのコロラド大学デンバー校音楽学部のアーバンキャンパスでのジャムセッションや、街中でのその他のジャムセッションで彼と知り合い、友人になりました。

もう一つの思い出に残るヒッチハイクのエピソードは、自分の車も持たずに、ある日の夕方遅くに、家から14 マイル離れたサウス ブロードウェイでヒッチハイクをしていたことでした。当時使っていたウーリツァーの電子ピアノ用に、中古のシアーズ シルバートーン アンプをイングルウッドの質屋で買ったばかりで、市営バスにそれを引っ張って行くのは気が進みませんでした。するとなんと、黄色いフォルクスワーゲンのビートルに乗った人がやって来て、私を乗せてくれました。それは、当時レッスンをしていた近くの楽器店から帰る途中のビル フリゼールでした。そして、私の家の玄関まで乗せてくれました。

今では生涯の友人となったスカイ・ワイズが、当時のリサイタルでクラリネット奏者としてフィーチャーされました。彼もメトロ州立大学音楽学部に在籍していました。スカイはティムと若いドラマーのスティーブ・ダウンズとともに、学校外で新しく結成されたフリー・ダート・アンサンブルを結成しました。特筆すべきことに、卒業後すぐにスカイと私は非営利慈善団体のアート・リーチ社に就職し、地域の多くの病院、老人ホーム、学校、精神保健施設で音楽演奏や音楽ワークショップを行いました。

これにより、私たちは2年間安定した収入を得ることができ、演奏技術とパフォーマンススキルを磨く良い機会を得るとともに、バーやクラブが求める純粋に商業的な音楽事業の期待に応えるプレッシャーなしに、私のレコーディングセッションの費用を賄うことができました。

リサイタルの演奏後、ボランティアのミュージシャンたちが私の作曲作品(Cool WhipとA Refined Mud Pie)を初演したことに對して喜んで受け取った唯一の報酬は、近くの Veteran's of Foreign Wars Chinese Restaurant、The Lotus Room での中華料理のディナーでした。私は若い頃、両親と一緒にそこで定期的に食事をして、時には10代の頃に取り組んでいた楽譜の原稿を持って行ったこともありました。しかし、リサイタルの後、私はワンタン スープを食べてベジタリアン食をやめたことをはっきりと覚えています。18歳以降の人生で野菜やその他の植物性物質以外のものを食べたのは、これが2回しかありませんでした。ティム、ビル、スカイ、そして私が演奏したまさに同じ曲が、その後すぐにInvisible Musicに収録されました。

トラック 3,5,6,9 ではティムの演奏が聞こえます。しかし、43年経った今、ベース パートに各プレイヤーの特徴が表れているため、トラック 1 で演奏していたのがタミーだったのかティムだったのか思い出せません。どう思いますか？

(続き)

トラック3

集合知

この曲は、他のいくつかの曲と同様に、冒頭に作曲されたメロディーのテーマがあり、その後以前に聞いたコード進行でジャズの即興演奏が繰り返され、最後に元のテーマをそのまま言い直して終わるという典型的なジャズ形式には従っていません。対照的に、Collective Intelligence は曲の途中で即興部分を区切るために作曲された素材を追加しています。また、すべてのポピュラー音楽や伝統的なジャズの大半で見られる三和音のハーモニーが一般的に使用されているのとは対照的に、4度と2度の音程に基づいたあまり一般的ではない代替ハーモニーも提示しています。

四分音符と和音は20世紀初頭に初めて導入されました。

これは、ドビュッシーやラヴェルなどの印象派の作曲家による「21世紀の音楽」に由来しており、秒単位で配列されたコード（互いに隣接する音符）の使用とともに私がよく採用しているスタイルです。

なぜ「Collective Intelligence」というタイトルを選んだのかはよくわかりませんが、個々の考えや表現をひとつの統一体にまとめた音楽バンドというアイデアを意味しているのかもしれませんが。

トラック4

何千ものバグ

このタイトルは、当時私が見た鮮明な夢の内容から来ています。

そして、それがこの曲の音楽内容と完璧に一致していることが分かりました。

この曲の起源は、メトロポリタン音楽大学の音楽理論の授業課題でした。私たちは「ロンド」と呼ばれるクラシック音楽の定義を学んだばかりで、理解度を示すために短いロンドを自分で作曲するように言われました。ロンドとは、メインテーマ（リフレイン）と対照的なテーマ（エピソード）が交互に繰り返される音楽構造です。リフレインには通常 A とラベルが付けられ、エピソードには B、C などのラベルが付けられます。たとえば、ABACADA または abracadabra などです。

私は教授の指示に従って自分の作品を完成させ、喜んで成績評価のために提出しました。いつもの私の習慣どおり、私は伝統から少し逸脱し、型破りなハーモニーや拍子記号の多数の変更、かなり奇妙なメロディーを採用しました。完成した原稿を返却されたとき、私は D という成績が付けられたことにかかなりがっかりしました。

私はすぐに抗議し、授業の後に教授のところへ行き、予想外の修正はあるものの、ロンドに与えられた指示に従った私の正確な方法論を辛抱強く説明しました。幸いなことに、当時の理論の先生であるタッパー教授は私のアプローチを理解し、私の成績を A- に変更してくれました。

『Thousands of Bugs』は、長年にわたり私のプロのレパートリーの中でもお気に入りの曲の一つであり続け、ある夏の夜、コロラド州バイルのジェラルド・フォード野外劇場で私が「マインド・ミュージック」と呼んでいるソロ演奏を行った際、少々困惑した観客の前で演奏したことさえあります。

トラック5 背面のトラック

タイトルは、一般的な表現を転用しただけのものです。
「軌道に戻る」。

明るく陽気なジャズ調の曲で、順調に盛り上がり、即興のサクソフォーンやフェンダー・ローズのエレクトリックピアノソロ、そしてティムが奏でる特に技巧的で独創的なベースラインが特徴です。

曲は、刺激的な結末というよりは、型破りなほどに緊張感を緩めていく形で終わり、ローズから突然奇妙な無調のピープ音が鳴り、続いてティムが突然ギターのコードをベースから引き抜いて、雑音とノイズが爆発するところで終わる。

完璧。

トラック6 アランギアン・コロンス

この独特な楽曲には、エレクトリックピアノが奏でるユニークなクラスターコード進行の解釈と、それをベースギターパートが受け継いで即興演奏する点を除いて、即興演奏は一切含まれていません。ジャズというよりは、クラシック音楽の楽曲との共通点が多いです。

この曲の創作のルーツも実にユニークで、楽器を一切使わずに発想し、書き上げ、鉛筆と原稿用紙だけを使って一人で机に座り作曲したのです。

ピアノやギターなどの楽器の助けを借りて音楽を作曲するという一般的な慣習とは異なり、私は、自分のアイデアをキーボードですぐに確認するのではなく、同じように頭の中で完全かつ正確な音楽のアイデアを聞き、それを直接紙に書き写すことができたモーツァルトやバッハのような、自分の知性だけを使って何かを創造しようと思いました。

もちろん、私は決してそのような種類の音楽家だとは思っていませんが、それでも「Arangian Colamsus」では全力を尽くし、少しも失望することはありませんでした。

この作品が作られた当時、私はヨガのコミュニティに深く関わっており、瞑想の探求、幽体離脱の概念の調査、並行宇宙や代替宇宙の考察にかなりの時間を費やしていました。そこで、新しい作品の制作を始めるにあたって、私は目を閉じて準備し、やがて照明を暗くすると、まるで異星のメロディーの世界に住んでいるかのような、さまざまな色の光の音楽の球体の中で跳ね回っている自分に気づきました。この世界には「アランギアン・コロンス」という名前が付けられました。

「何だこりゃ」と言う前に、目の前の楽譜用紙にきれいに走り書きされた音符が山ほどあって、曲が潜在意識を通して私に伝わってきた。ピアノの前に座って初めて、「おい、これはちょっとキャッチーな曲だ！」と断言できた。

幸いなことに、バンド側も異議を唱えなかった。

トラック7
4番

これもクール・ホイップと同様、私がまだ若かった頃、おそらく19歳くらいの頃に、母がニュージャージーで私が7歳の時に50ドルで買った1890年代のコーラー・アンド・キャンベルのアップライトピアノで作った曲です。私が8歳の時、母は他の持ち物と一緒にそれをデンバーの西に移し、私は子供時代から高校、大学時代、そして大人になった今でも、ずっとそのピアノで実験をしていました。長い耐用年数を経たこの楽器は、幸いにもこの地下室に永住の地を見つけました。それも、信じられないことに3回も狭い地下室の階段を持ち上げたり上下に動かしたりして、時には動けなくなるところだったのに。

ピアノには常にホンキートンクの音質があり、ラグタイム音楽にぴったりでした。そして、その音色は、初期のフリー・リーリン・スタジオにあった、同じく世紀の変わり目のグランド・アップライト・ピアノと非常によく似ていました。特に現代的な音色のピアノではありませんでしたが、曲にはよく合っていました。

4番も他のトラックと同様に、即興のピアノソロセクションがいくつか挟まれた大量の作曲素材で構成されており、クラシックなアプローチとジャズの感情が融合した曲になっています。

トラック8
ホームーのカンタローブ

私の最初の犬の仲間であるホームーに対する愛情は、曲の4分の3ほどの短い合唱で表現され、続いて2匹目の犬であるヴォンシーの合唱が続き、私の吠え声と組み合わせられます。



ホームーのカンタローブは、タイトル自体がハービー・ハンコックのウォーターメロン・マンに触発された。アルバムの中で最も野心的で演奏が難しい曲として残っている。この曲は、私のライブ演奏レパートリーの中でも重要な位置を占め、

コンサートのあらゆる場面で盛り上がる締めくくりの曲。曲の形式は、複雑な旋律のテーマと、それに続く型破りで対照的な即興セクションを組み合わせたもので、最後にメインテーマに戻ってコーダを奏でます。一度弾けるようになると、演奏するのがとても楽しくなります。

これは、地球上で最も偉大な犬の一匹であるホーマーへの音楽的なトリビュートと敬意として永遠に残るでしょう。

トラック9 洗練されたマッドパイ

私はこの曲を「A Refined Mud Pie」と名付けました。これは、大人の音楽活動に対する私の認識から、幼児の創造的衝動が泥の中で完成された大人の表現として見られると感じたからです。

メロディとリズムの構成は、ジャズ サックス奏者のエリック ドルフィーのスタイル特性に由来しており、1960年頃のプレスティッジ レーベルでの初期の録音で聞くことができます。このような類似した角張った不協和なメロディのハーモニー構造は、ザッパ自身の解釈とトリビュートであるエリック ドルフィー メモリアル バーベキューの録音にも見ることができます。

『A Refined Mud Pie』は、20年間にわたって私のバンドのセットリストに定着し、デンバー美術館の水曜日の夜の独身者の集まりでロマンチックな冒険を求める観客を満足に困惑させ、また、デンバー・ポロ・クラブの高級住宅街で行われたブラックタイのクリスマスパーティーで人々の眉をひそめさせることが分かりました。

トラック10 ホームムービーのテーマ

デンバーは、市民に放送する公共テレビチャンネルが1つではなく2つあるという点で、アメリカの都市の中でもユニークです。視聴者シェアを巡ってある程度競合しているのは、より伝統的で保守的かつリベラルなKRMA TVチャンネル6と、そのチャンネルと対照的なのが、極めて予測不可能でリベラルなKBDIチャンネル12です。チャンネル6は常にデンバーのダウンタウンにあるレンガ造りの建物から放送していましたが、チャンネル12は、デンバー ボルダーターンパイクの近くの郊外ブルームフィールドにある原始的な金属製のクオンセット小屋で反逆的なスタートを切りました。詳細については、[KBDIチャンネル12の歴史](#)を参照してください。これは私がでっち上げたものではありません。

チャンネル12は、少なくとも初期の頃は、ケーブルテレビのDIY倫理によく似た番組作りに挑戦し、チャンネル6が絶対に手を出さないようなコンテンツを放送していました。そのような冒険的な番組の1つが「Teletunes」です。これは、MTVより6か月前に放送されていた、初期のロックンロール ビデオの音楽コラージュです。

さらに革新的なのは、家庭の視聴者が、考えられるあらゆる内容と品質の自家製8ミリフィルムやビデオ作品を番組に提供することを奨励した、オリジナルの長寿番組「ホームムービー」でした。

1981年、パートタイムの地元のスタンダップコメディアン、ビル・ハメルと、スティーブ・ジョブズそっくりの彼のストリートマン、ニック・フレイジャーによって制作されたこの番組は、実に7年後のサタデー・ナイト・ライブのウェインズ・ワールドの寸劇でしか特徴づけられないような、楽しく荒っぽいアマチュア作品だった。

「アメリカズ・ファニースト・ホーム・ムービー」のような全国放送の番組が作られるずっと前から、ニックとビルは毎週、デンバー地域の素人映画製作者やビデオ製作者が撮影した作品だけを放送していました。どんな作品でもかまわず、内容は、まったく原始的で意味不明なホーム・ムービーから、筋書きや自家製の音楽まで、手の込んだホーム・プロダクションまで多岐にわたりました。

これらすべてが「Home Movies」への感謝の気持ちにつながり、この番組での素晴らしい経験に対して、私は新しいテーマソング「Ode To Home Movies」を書き、きちんと録音しました。この曲は番組で初公開され、それ以降番組の最後に使われました。この曲は、私の信頼できるセルマー スーパー バランスド アクションのサクソソロと、このトラックの適切でわかりやすい効果音とともに、このアルバムでも心地よく適切な位置を占めています。

トラック11

グリーン変奏曲

私の高校と大学の友人のガールフレンドは、レスリー・グリーンという名の駆け出しの芸術家でした。彼女はある晩、ダウントウンの下町エリアで初めての美術展を企画し、私に音楽のバックグラウンドを少し教えてくれないうか頼んできました。

私は、彼女のショー中に PA システムを通じて提供された、非常に即興的な音楽の三和音を録音することに着手しました。ある晩、私は Free Reelin' の外にある Jamie Kurtz という友人のスタジオでこれを録音しました。彼は当時、このトラックで使用された画期的で革新的な Yamaha DX-7 シンセサイザーと、その後しばらくして登場した Sony MD8 デジタル テープ マシンを私に紹介してくれました。

これら2つのデバイスは、後の私の人生と音楽録音能力に大きな影響を与え、ついに自宅で完全にプロフェッショナルなサウンドの録音を開始できるようになりました。

レスリーはパリで芸術を追求し続け、現在もそこで暮らし、仕事を続けています。

残念ながら、レスリーの初期の美術展からの録音で残っているのは、『Invisible Music』のフィナーレにふさわしい『The Green Variations』の第3楽章だけです。

それでも、それは素晴らしく奇妙で混沌としており、誠実で規則を無視した、Invisible Musicのすべてが生まれた時代と場所の表現である。

-ニール・スレイド、2025年1月

デンバーの自由の鐘の前で音楽の独立宣言を発表



写真中央、ロバート・ウルフソン博士、右、フレッド・ポインデクスター 右にひざまずいているのは私

1996年6月1日、デンバーにて 満場一致の音楽独立宣言

人間の活動の過程で、ある芸術家グループが、特定の商業事業において彼らに課せられた政治的、経済的制約を解消し、市場の勢力の中で、個人の創造性の法則によって彼らに与えられた独立かつ平等な地位を獲得することが必要になったとき、人類の意見に対する正当な敬意から、彼らはその分離を強いる原因を表明すべきである。

-----私たちは、すべての音楽家は平等に創られ、創造主から特定の不可侵の権利を授けられており、その中にはメロディー、明瞭性、非三次和音の追求、奇数拍子記号などがあるという真実を自明であると信じています。-----商業的流通システムがこれらの目的を破壊した場合はいつでも、表現と市場配置の新しい形式を変更または確立し、音楽の良い点に関する新しい理想を制定し、音楽の演奏が許可されている公共および私的な会場でそのような音響形式を創造、表現、促進することは、演奏者の権利です。音楽に関係のない弁護士、企業やレコード会社の幹部、そして行き詰まった聴衆から、個々のミュージシャンやアーティストに対して、適切で受け入れられる音楽表現とは何かという長年にわたる罵倒や命令が強要されている場合、そのようなレコード会社の利益動機の束縛を捨て、将来の表現の自由のための新しい防御策を講じることは、彼らの権利であり、義務です。---これが、大学で訓練を受けたミュージシャンも独学のミュージシャンも辛抱強く耐えてきたことであり、今やそれが、彼らに以前の芸術的優先順位のシステムを変更せざるを得ない必要性となっているのです。これを証明するには、事実を率直な世界に提出しましょう。----- 私たちは永遠に四分音符で演奏することを強制されてきました。-----最後の4小節を除いて、どの曲でもテンポを変更することができませんでした。-----作曲では、メジャーモードとマイナーモード、ペンタトニックスケール、ブルーススケールのように固執するように強いられてきました。-

-----特に即興で演奏される15秒を超える楽器ソロは削除するように求められています。-----身体的に地味な人や明らかに魅力のない人は、公の場で才能を披露することを禁じられたり、思いとどまらせられたりしています。-----3分半を超える、または2分半未満の音楽形式を演奏したり考案したりすることを禁じられています。-----楽器を演奏したり歌ったりしながら、同時にダンスをしたり、不自然な体の動きをすることが求められています。-----まだ稼いでいないお金をミュージックビデオに費やすことが求められており、そのビデオは収益性の高いネットワークテレビに無料で配布することが求められています。-----

---したがって、私たちは、デンバーのミュージシャンの代表として、組合員と非組合員、加盟しているかどうか、無所属かどうか、契約しているかどうかにかかわらず、演奏しているかどうかにかかわらず、演奏家と隠れミュージシャンとして、メロディー、ハーモニー、リズムの至高のミュージックに訴え、デンバーの善良で理解のある聴衆の名において、その権威によって、これらの作曲家、演奏者、聴衆は自由で独立した思想家であるべきであり、商業的配慮や利益動機への忠誠心から解放され、彼らに対するすべての政治的、知的制約は完全に解消され、解消されるべきであり、自由で独立した思想家、真に創造的なアーティストとして、スタイルに関係なくすべてを受け入れ、誰にも排他的ではなく、心と脳と精神が指示するとおりに音楽を演奏する完全な力を持っていることを公表し、宣言します。

[驚異の脳の冒険](#)

[ニールスレイドミュージック](#)

[ニール・スレイドの YouTube チャンネル](#)

[ジュリア・ルーの異次元の絵画](#)

メールア

[ドレス: n3@neislade.com](mailto:n3@neislade.com)